近世後期における患者の医師選択

『鈴木平九郎公私日記』を中心に

長田直子

How Did Late Tokugawa Villagers Choose Doctors?

はじめに
❶鈴木平九郎と『公私日記』
❷患者から見た医師の存在
❸江戸の医師への選択
❹江戸の医師選択の背景
まとめ

[論文要旨]

医師による医療が村でも広まった近世後期、人々は病に罹ったとき医師をどのように選択したのか。本稿では、都市近郊農村である多摩地域名主の日記鈴木平九郎『公私日記』を取り上げ、近世後期から幕末期にかけての患者側の医師選択について、江戸との関わりを含めて考察を試みた。

近世後期の多摩地域も他地域と同様に多数の医師がいた。幕末期には江戸の蘭学塾で蘭学を学ぶ者も現れていた。そうした状況の中で、鈴木家や鈴木家の親せき達は通常かかりつけとも言うべき医師に頼っていた。かかりつけ医師は、たんに地域的条件のみによらず、親戚関係・文化関係などによって決められていた。しかし、専門性の必要な眼科や外科、また病気の進行状態によって遠くの専門医やかつて江戸で開業していた蘭方医に診療を求めた。ただし、かかりつけ医師の存在は患者にとって大きく、遠方の医師にかかってもその傍らでかかりつけの医師に頼っていた。

さらに、この地域の人々は病が重くなると、江戸という選択肢を選んでいた。彼らが頼る江戸の医師達は蘭学塾の師匠、または藩医や当時外科で名が知られていたトップクラスの医師達であった。しかし、それらの医師達でさえ、患者の病状によっては、選択され、江戸を抜けてさらに評判の医師の元に医師替えをされることもあった。患者側はたんに江戸の医師を求めるのみならず、シビアな判断で医師選択を行える状況になっていたのである。多摩地域の患者達が求める江戸の医師達は、蘭方医が多かった。この背景として、多摩地域と伊東玄朴及び象先堂門人とのつながりが考えられた。また、江戸の人々とのつながり、時期的背景、経済的背景に加えてこの地域が甲州街道沿いかつ都市近郊農村であったことも背景としてあったとおもわれる。この地域の患者による医師選択には地域的特色があらわれていたのである。

はじめに

近世における在村医療を考えるとき、その発展段階には大きく分けて三つの画期がある。①一八世紀以前、村に医師が登場する以前の段階、②一八世紀から化政期にかけて、村に医師が登場し、徐々に増えてゆく段階、そして③化政期から幕末期にかけて、人々の医療需要と共に医師が増え、さらに医師が再生産され、同時に蘭学塾で学んだ在村蘭方医も広く活動を行う、いわば在村医師が充実・成熟する段階である。

在村医療の実態はこれまでに主として、以上の②③の段階の時期について明らかにされてきた[1]。しかし、これまでに大都市近郊農村をとりあげた研究はほとんどない。農村でありながら都市の影響をもうける大都市近郊農村の状況を明らかにすることで、これまで以上に多様な医療の実態を知ることができるのではないだろうか。そこで、本稿では大都市江戸近郊農村であり、かつ江戸と行き来の多い街道沿いの村である多摩地域を取り上げる。

多摩地域においてはどのような医療が展開されたのだろうか。③の段階である、化政期から幕末期にかけての医師成熟期の中での状況について、武州多摩郡柴崎村（現、立川市）の名主、鈴木平九郎『公私日記』から見ることができる。近世後期、多摩地域では村の名主達により数多くの日記が書き残された。鈴木平九郎『公私日記』（以下、『公私日記』とする）もその中の一つであり、天保期から安政期にかけて鈴木平九郎が記した鈴木家一代の日記である。この日記は、二〇年間ほぼ毎日欠かすことなく記された記録であり、医師成熟期の中での状況や変化を知ることができる。その内容も、地域医療から個人が病にかかった時の経過と対処に至るまで、同時期に記された他日記に比べて豊富である。医療を受ける患者達にとって医師はどのような存在であり、患者達は医師達をどのように見ていたのか、そしてどのような判断のもと医師を選択していたのかを窺い知ることができる。しかし、『公私日記』については、これまで村における日記の役割、家の経済的側面等様々な角度から考察した研究はあるものの、医療史の流れの中で考察した論考はほとんどなかった[2]。そこで、本稿では鈴木平九郎『公私日記』全二〇冊を中心に、患者側から見た医師選択の実態を明らかにすることを試みる[3]。

まず第一節で、公私日記の筆者鈴木平九郎及び『公私日記』について見る。次に、第二節で近世後期のこの地域の医師の状況を見、患者とかかりつけ医師の関わりについてみてゆきたい。第三節で江戸や、さらに遠方の医師選択について、第四節で江戸選択の背景について見てゆきたい。

❶鈴木平九郎と『公私日記』

『公私日記』は、その長期間にわたる記載と内容の豊富さからこの地域の日記研究の中では有名であり、日記の書かれた背景や筆者について、鈴木家の経営についてなどを中心に、既に多くの先行研究によって考察されてきた[4]。本稿では日記自体の分析はしないが、この地域の医療状況を見る前に、基礎となる背景について先行研究をもとに見よう[5]。

(1)柴崎村と鈴木平九郎

まず、この『公私日記』の筆者鈴木平九郎の住む武州多摩郡柴崎村（現、立川市）について見よう。柴崎村は、村の南東が甲州道中に接し、南側は多摩川が流れる。江戸日本橋から一〇里半ほど、江戸へは一日で行くことのできる距離に位置する（図1）。日記が記された時期の、柴崎村の状況については詳細には解らない。しかし、明和八（一七七一）年の『柴崎村村鑑帳』によると、総村高一一三七石八斗五升四合、家数

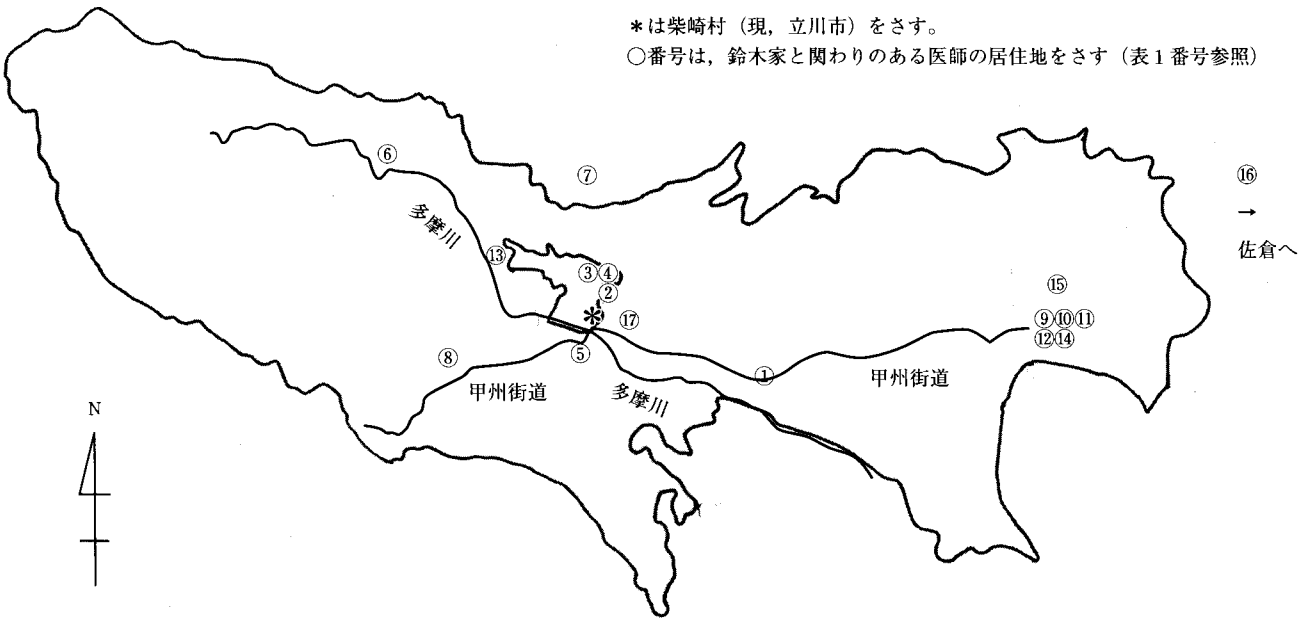

図 『公私日記』に現れる医師の分布

二四六軒、人口一〇五六名であり、大部分の幕領と一部の寺社領・旗本領、さらに尾州鷹場支配を受ける比較的大きな村であった。そのうち、田が三〇町七反分、畑地は三一七町五反八畝一八歩「地形平陸にして四方打開け、陸田多く水田少し」といわれた通り、村の八九％が畑地を占める畑作中心の村であった。こうした条件の村であったため、村の人々は畑作の傍ら川と街道に深く関わった生活を営んだ。[6] 畑作・山繭等の特産物生産や養蚕を営む一方、多摩川で鮎漁を行い、農閑期には隣接する日野宿や八王子宿・江戸市場へ商品荷物を運ぶ駄賃稼ぎ等で生活していたという。そのため、日常的に江戸の人々と頻繁に交流を行っていた。

次に、この『公私日記』の筆者鈴木平九郎について見たい。鈴木平九郎重固（一八〇七～六四。以下、平九郎と記す）は文化四（一八〇七）年、この柴崎村の名主中嶋次郎兵衛・春の次男として生まれた。しかし、天保六（一八三五）年霜月廿日、文化十二年から約二十年間断絶していた村の名主家、鈴木家再興のために妻嘉代と子供を引き連れて鈴木家に入ることとなる。以後幕末期まで鈴木家第十一代当主として生家の中嶋家と共に年番名主を勤めた。嘉永五（一八五二）年時点には日野宿寄場組合四四カ村の大惣代・多摩川上ヶ鮎御用世話役等約七種類もの要職もこなし、村内のみならず、村外の要職まで担う有力者となった。その傍ら家職として、商品作物の生産・売却、養蚕業・金融活動を営んでいた。先に見た、街道沿いの都市近郊農村であるこの地域の特色は、鈴木家の仕事にも反映している。平九郎は、上記の仕事の傍ら、江戸や八王子への荷物送りにも携わっていた。江戸の本船町・横山町・大伝馬町等の江戸店とつながりを持ち、馬士を使い、頻繁に行き来をしていたという。一方、平九郎はこれらの仕事の反面、私的にも俳諧や漢詩などを通して近隣の文化人らと交流を持ち、親戚関係等でも常に江戸との交流も持った。

つまり平九郎は、村内で村役人・有力者として活動する傍ら、村外で

も様々な役割を持つ者であった。その交流は村内外の有力者から文化人仲間・店に関わる江戸の知り合いに至るまで、内容的にも地理的にも幅広いものであった。[7]

(2)日記について

今回取り上げる『公私日記』は、天保八（一八三七）年から安政五（一八五八）年にかけて（弘化元年は除く）の二〇年余りの日記である。平九郎が『公私日記』を記し始めた天保八年は、鈴木家に養子入りして二年目の年、三一歳の時であった。平九郎は、この日記を記した理由を日記冒頭の凡例等でたびたび記した。そこでは、養家を再興した時から後世に伝える意識、さらに、御用留からのみでは解らない今の状況を、日記で補完する意識・日記中の公私混雑は私のしたことも後世では「事務形勢」を知りうる公なる史料たりうること、そのために『公私日記』と表題した日記を長く書きつづける決意を記している。

この点について、一八世紀後半以降の村の有力者層が村の歴史を記した背景を分析された岩橋清美氏は、鈴木家の再興と家格の上昇の過程という、平九郎の家意識の確立を指摘している。[8] つまり平九郎の記したこの『公私日記』は、平九郎の家と後世を意識した強い意志によって記された記録であった。

こうした平九郎の強い意識のもと、毎日欠かさず書き綴られた日記であるため、村政から日常生活に至るまでの内容は豊富である。天保の飢饉や改革等の社会的な状況、政治に対してのアンテナが張られると同時に、村政に関わる公的記述、月々の村の相場、農事、娘の武家奉公や息子の医学修行など日常生活の私的な事柄に至るまで詳細である。それは、医療記載にも反映している。たびたび全国的に大流行する伝染病の状況から、村内・近村で流行した伝染病と村・組単位での対応、村民の死、自分や周りの人々の病気の経過とその対処に至るまでこと細かに記した。[9] 本稿で取り上げる個人的な病については、鈴木家の人々、鈴木平九郎生家の中嶋家、妻の生家の平家、娘の嫁ぎ先である上布田の白鳥家、平九郎の義兄弟中嶋次郎兵衛の生家である萩嶋家、鈴木家及び鈴木家を取り巻く親戚達の状況が中心である。[10] そういった意味では、記載に偏りが見られるが、その病状の経過や対処等の記載は詳細であり、患者から見た医師選択の実態を知る方法として有効であると思われる。

❷患者から見た医師の存在

(1)十九世紀の医師の状況

では、この地域ではどのような医師がどのような活動を行っていたのだろうか。まず、患者と医師の関係について見るまえに、多摩地域の医師の状況についてみたい。前述のとおり、この地域には多くの日記類が残されているが、それらの多くは『公私日記』を含めて一九世紀以降に記されており、[11] 日記からそれ以前の医師の状況を把握することは難しい。しかし、柴崎村より西の五日市村や伊奈村（ともに現、あきる野市）の村明細帳を見る限り、「医師三人」（享保元〈一七一六〉年）や「当村本道医師弐人御座候」（享保十九〈一七三四〉年）という記載があることから、享保期には既に複数の医師が活動を行っていたことが解る。[12] 一八世紀には既に村の医師が活動していたことが他地域の例により明らかにされているが、[13] 多摩地域でも同様に一八世紀前半には医師が活動していた。ただし、数的には決して多くなく、実際の活動についても解らない。数多くの医師を確認できるのは文化・文政期から天保期以降である。

天保期以降の医師の状況について『公私日記』から見よう。表1は、天保八（一八三七）年から安政五（一八五八）年までの間に日記に登場する医師達である。この中に頻繁に現れる医師については、既に先行研

表1　公私日記に現れる医師

医　師　名	居　住　地	現市町村名	日記登場年	備　　考
福　島	砂川村	立川市	天保8年	
大島氏	谷保村	国立市	天保8年	
小林忠輔	千人町→柴崎村	八王子市→立川市	天保8・9年	
川崎村外科医師	川崎村	羽村市	天保8・12年	外科医
竜作(龍作・立作)②	伊奈→柴崎村→横沢村→柴崎村→砂川村	あきる野市→立川市→あきる野市→立川市→立川市	天保9・11・12年，弘化3・5年，嘉永3～5・7年	柴崎村に寓居
白鳥彝斎①	市ヶ谷→下布田村	新宿区→調布市	天保9年～15年，弘化3年～5年，嘉永2～7年安政2・5年	天保9年江戸市ヶ谷から下布田村へ転居／天保9・10年は診療の記載なし
三十軒堀眼療医師	三十軒堀	中央区	天保9年	眼科医／三十間堀の誤りヵ／診療の記載はなし
岡□様医師	——	——	天保10年	
三木氏	戸吹村	八王子市	天保11・13年	
本田覚庵⑰	谷保村	国立市	天保11年，嘉永2・3・5年，安政2・3年	下谷保村(国立市)名主／産科医
泰　順	日　野	日野市	天保11年	
木村貞碩③	二宮村→砂川村	立川市	天保12～14年	
雲　南	砂川村→柴崎村→大丸村	立川市→立川市→稲城市	天保12年，弘化5年，嘉永2・5～7年	養禅院・常楽院に寄宿の医師
砂川医師	砂川村	立川市	天保12年，弘化4年	雲南と同一人物ヵ
日野泰順	日　野	日野市	天保11年	
田辺道安(森川意安)	下川原	立川市カ	天保13・14年	
順　道	品　川	品川区	天保14年	遊歴中に立ち寄る。診療の記載はなし
東　雲	拝　島	昭島市	天保15年	
安積育斎	日　野	日野市	天保11・15年，弘化4・5年・嘉永2年	
伊藤玄珉⑧	浅草→八王子	台東区→八王子市	天保15年，弘化3・5年，嘉永3～6年	象先堂門人／弘化3年江戸浅草から八王子へ転居
伊東玄朴⑨	下谷御徒町	台東区	弘化3・4年，嘉永2・3・5～7年，安政5年	象先堂師匠
五蔵円	八王子	八王子市	天保15年，弘化3年	口中医・入れ歯師
三ヶ嶋(三ヶ嶋赤門)⑦	三ヶ嶋村	埼玉県	弘化3年～5年，嘉永2・3年	眼科医・外科
畑中文仲	江　戸	東京都	弘化4年	蘭馨堂門人／松山藩医
天　龍	平山村	日野市	弘化4年	
種村祐眠④	高麗郡→柴崎村→府中→勢州松坂	埼玉県→立川市→府中市→三重県	弘化5年，嘉永2・4・6年	柴崎村村請医師
石田伊十郎(土方医師・石田眼医師・石田土方氏)⑤	石田村	日野市	嘉永2～4・6・7年，安政2・5年	眼科医
原山通亭	——	——	嘉永2年	
八王子十日市場医師	八王子十日市場	八王子市	嘉永2年	

忠左衛門	砂川村	立川市	嘉永2年	砂川村下宿／口中医
師岡氏	——	——	嘉永2年	
中神医師	中神村	昭島市	嘉永2年	
潜　龍	染谷村	日野市	嘉永2年	
和田昌老	村松町	中央区	嘉永3年	古方医／診療の記載はなし
松村養全⑩	江　戸	東京都	嘉永3年	紀州藩医／蘭方医
間　島	——	——	嘉永3年	
細野氏	小田分村	府中市	嘉永3年	
大槻俊斉⑪	江　戸	台東区	嘉永3・6・7年，安政5年	西洋医学所頭取
織田研斎⑫	府中／江戸	府中市／東京	嘉永3・6年	象先堂門人／のちに象先堂塾頭／伊東貫斎の兄
府中社家織田氏	府　中	府中市	嘉永3年・安政2年	織田研斎・貫斎の実家，研斎・貫斎のどちらかヵ
砂川歯医者	砂川村	立川市	嘉永3年	歯医者
拝島医師	拝　島	昭島市	嘉永4年	
最明寺	元八王子	八王子市	嘉永6年	元八王子八幡別当
鶴蔵六	柴崎村→江戸	立川市→東京都	嘉永6年	普済寺に寄宿の医師／象先堂門人／のちに故郷の肥前多久へ（国分寺市本多雖軒文書より）
五日市医師	五日市	あきる野市	嘉永6年	診療の記載はなし
日野下川原医師	日野下川原	日野市	嘉永7年	
立野立長	江　戸	東京都	嘉永7年	
名倉⑮	米沢町カ（江戸）	中央区ヵ	嘉永7年	骨ね接ぎ
佐藤泰然⑯	佐　倉	千葉県佐倉市	嘉永7年	佐倉順天堂師匠
林	米沢町（江戸）	中央区	嘉永7年	
宮本秀悦⑥	青　梅	青梅市	安政2・3年	
田子栄三⑬	箱根ヶ崎村	福生市	安政2年	
磯野文鼎	お玉ヶ池	中央区	安政2年	
水町玄道	お玉ヶ池	中央区	安政2年	鈴木準三の医学修業先／象先堂門人／診療の記載はなし
相沢宗貞⑭	木挽町	中央区	安政3年	
井上偶居	——	——	安政3年	
福島立庵	下和田村ヵ	立川市ヵ	安政3年	
伊東咸斉（貫斎）	府中／江戸	府中市／東京	安政5年	象先堂門人／日記中に御目見任命についての記載あり／診療の記載はなし
井口永達	八王子	八王子市	安政5年	八王子に寓居の医師／麹町岡部候藩医の隠居
相　沢	関戸村	多摩市	安政5年	

立川市教育委員会編『公私日記』第1～20冊（天保8～安政4年）（立川市教育委員会，1972年～83年）より作成。
※　医師名欄の数字は図の数字と対応。按摩・もみ医者の類は除いた。
「現市町村名」は東京都以外は県名も記載し，都内で該当区不明の場合，「東京都」とのみ記した。
表中の「→」は居住地の移動を指す。

究によって検討されているため、ここでは全体的な傾向をみてみたい。

表1のとおり、この二〇年間の中で『公私日記』に現れる医師は多い。天保期には既に村で開業している医師が多く、その種類も様々であることがわかる。化政期以降幕末期まで、人々の医師による医療需要と共に、代々の医家や他で修行した医師達が、村内で開業する傍ら、弟子を養成して医師の再生産もしていた。無医村では、名主達がこのような医師の下で自分の子供を医師にしようとする動きも見られる。さらに、幕末期には蘭学塾で蘭方を修得した者も見える。とりわけ、この多摩地域では江戸の伊東玄朴塾（象先堂）への入門者が多い。象先堂塾頭となり紀州藩藩医を勤めた織田研斎、研斎の弟で後に玄朴の養子となった伊東（織田）貫斎などが入門していた。

これら村出身の医師がいた一方、村で一時開業し、その後他の土地に移動する渡り医師ともいわれた非定住医も目立つ。前述の通り柴崎村をはじめ、この多摩地域は甲州街道に面した村々が数多くあった。さらに、江戸都市近郊農村であったため、修行のために移動する医師が多く通過した。これらの医師の中には、この村で診療活動は行わずたんに村を通過するのみの者もいたが、中には名主達の紹介で村内の養禅院や安楽院といった寺や有力者の家や長屋に寄留して活動する医師もいた。[14] 無医村では、こうした旅の医師を村請け（または個人請け）にすることで、需要にこたえようとしていた。

もっとも、この史料が「日記」という性質上、記載は筆者及び筆者と関わりのある人々、村人達が中心である。そのため、この地域の医師やこの地域の人々が罹った医師達を網羅しているわけではない。例えば、この多摩地域には、伊東玄朴門人でフーフェランドの『済生三方附医戒』を翻刻し、佐藤泰然等とも交流を持った八王子の秋山佐蔵、佐蔵の父で同じく医師であった秋山義方、適塾門人で当時この地で種痘を広めた青木芳斉（湯浅・平ともいう）は含まれていない。[15] その他にも日記中には登場しない地域の有名な医師もいるため、幕末期には、定住医・非定住医ともに実際にはもっと多くの医師（少なくとも医学塾等の教育を受けた医師や、受益者達が「医師」と見なした治療者達）が活動を行っていたと思われる。[16] 村医師の実態が不明な地域が多いことから、全国的な中での多摩地域の医師についての位置づけは難しい。しかし、以上の状況を見る限り、これまでに解っている他の地域と考えた時、多摩地域の医師は決して少ない方ではなかったと思われる。[17]

柴崎村に関して見よう。表に見えるとおり、柴崎村に定住医は見あたらない。柴崎村内に現れる医師達は、他村出身者であり、村に一時逗留するものの、定住することはほとんどなかった。しかし、こうした定住医師のいない村の場合でも医師にかかれないということはなかった。鈴木家では、平九郎自身は医業を行っていなかったが、幕末の嘉永期・安政期に長男・二男を医師としようとし、白鳥医師や江戸の伊東玄朴門人水町玄道の所に修行に赴かせようとしていた。[18] 同時に、柴崎村では非定住医たちにも頼っていた。この表に現れる通り、この村の医療は非定住医や周辺の村の医師達によって支えられていた。この地域の人々の診療に当たった医師は距離的にも幅が広く、望めば医師にかかれる状況であった。医師は人々が病を治す時の一つの手段として、選択することができたのである。

(2) かかりつけ医師の存在——鈴木家と中嶋家の場合——

以上、多摩地域の医師の状況について見た。鈴木家を始めとして、村の人々は村内の医師に限らず遠方の医師までかかっていた。しかし、その中でも患者達は医師選択をしており、主にかかるかかりつけ医師というべき存在が見られる。かかりつけ医師的な医師の存在は他地域でも見られるが、かかりつけ医師の選択はどのような背景によって決められていたのだろうか。[19] ここでは、受益者である鈴木家及び中島家と医師との

関係から、かかりつけ医師選択の背景について見たい。

白鳥氏との関係

『公私日記』を通してみる限り、柴崎村の鈴木家と中島家が病気に罹ったときに診療を頼る主な医師は、白鳥彝斎・山中竜作・木村貞碩・種村祐眠などである。この四者とも他村から引越してきた医師や一時のみ家業する医師、他村で開業する医師達であった。

これらの医師については、既に先行研究で取り上げられているため、ここではそれをもとに概要のみ記したい。[20] まず、白鳥彝斎（図1①参照）は下布田村（現、調布市）の漢方医である。もともと江戸市ヶ谷で開業していたが、天保九（一八三八）年に下布田村に転居する。白鳥彝斎へは、鈴木平九郎の妹さえが嫁いでおり、さえの死後再び鈴木家から嫁いでいる。白鳥彝斎の診療は、主に天保期・弘化期・嘉永期に多いが、日記を通して登場し、長期間に渡って鈴木家・中嶋家のかかりつけ的存在であったと考えられる。例えば、天保十一（一八四〇）年から弘化五（一八四八）年の八年の間に、中嶋家では一五回あまり、鈴木家では五〇回ちかく罹っており、その内容も、風邪や腹痛から産後の診療まであらゆる病を診療している。白鳥彝斎の住む下布田村は、柴崎村から三里余りあり、同じ多摩地域とはいえ前節で見た表の中に現れる医師としては、柴崎村から近距離の医師とは言えない。つまり、鈴木家や中嶋家の場合、近距離であることに加えて、血縁関係がかかりつけ医師選択の背景となっていたことが解る。[21]

次に白鳥医師に次いで鈴木家や中嶋氏を始め、柴崎村の人々がかかっている医師は、竜作（図1②）である。竜作はもともと伊奈村（現、あきる野市）に住んでいたが、天保九（一八三八）年に柴崎村に越し、その後横沢村→柴崎村→砂川村と次々と転居する。柴崎村・砂川村での活動期間中、鈴木家・中嶋家の人々は軽い病気や病気の初期、急病時に診療を行っているが、多少病気が進んだ時点や、それらの医師が去った後には白鳥氏の診療を頼んでいる。

時期によっては、村内・近村に一時逗留する村請医師として木村貞碩・種村祐眠（図③④）が見られる。木村貞碩は江戸東叡山下出身で、二宮村に越したのち、天保十一（一八四〇）年から翌十二年のみ砂川村に逗留する。一方種村祐眠は高麗郡（現、埼玉県）から柴崎村へ越し、府中へ越し、勢州松坂に赴く弘化五年から嘉永六年まで診療に当たっている。両者も短期間の滞在であり、鈴木家では逗留する際の相談や世話等をしているものの、多少かかる程度であり、白鳥氏ほど頻繁には罹っていない。

これらから、鈴木家や中嶋家の場合、定住医のいない柴崎村で一時開業する医師、村請け医師、親戚関係の者がかかりつけ医師的存在であった。中でも主なかかりつけ医師は白鳥氏であったと考えられる。では、この近村には、これらの医師以外にかかりつけとなるべき医師がいなかったのだろうか。既に見たとおり、柴崎村に定住医はいなかったが、その近村に医師はいた。次に、この近村で医業を行っていた医師本田家図1⑰との関係に注目したい。

近村の医師と患者との関係

本田家は柴崎村隣村の谷保村（現、国立市）で近世後期以降活動した医家である。[22] 本田家は下谷保村の名主であったが、名主を務める傍ら、化政期以降村内・近村を中心に広範囲で診療活動を行う、この地域では有名な医師（産科医）であった。この『公私日記』の記された期間は、天保四（一八三三）年頃まで江戸で修行を積んだ本田家十一代覚庵が診療活動を行っていた時期である。[23] 本田覚庵は、天保九（一八三八）年には、下谷保村の名主役を務める傍ら、約一年間で延べ二八〇〇名以上もの村内・近村の患者を中心に診療している。しかし、この年の本田家の診療記録では、鈴木家・中嶋家の人々の名はない。反対に『公私日記』の中でも、本田家は名主としての交流や、書家としての活動でしばしば

登場する反面、医師として鈴木家を診療する場面は数回にとどまり、大変少ない。[24] 本田家が専門としていたのは産科であったが、産後ですら鈴木家は白鳥氏を呼んでいる。つまり、鈴木家と近村の本田家との間には、患者とかかりつけ医師の関係が成り立たない。

この状況は、鈴木家に限ったことなのだろうか。実はそうではない。もう一つの例として鈴木家から少し離れた小野路村（現町田市）の小島家の場合を見てみよう。小島家は小野路村の名主であり、多摩の広域で名主達と交流を行っている。鈴木家と同様、天保期から近代にかけて日記を記しており、小島家の人々の病についても記している。小島家の場合、時期によってかかる医師は変わるが、主としてかかりつけ的医師は、伊東玄朴門人であり、八王子で開業する蘭方医秋山氏や町田の青木氏などであった。[25] 小島家と本田家の関係は、覚庵の死後小島家の当主が葬式に行き、追悼の詩も詠む程の関係であった。しかし、天保期を見る限り、覚庵は医師としては登場しない。[26]

つまり、鈴木家と①②の医師との関係から、かかりつけ医師はたんに近村の医師とは限らない。村の有力者の場合、村請け医師を引き留めているという事情がない時には、近村であるかどうかという理由のみならず、血縁関係・文化人としてのつながりや、村役人としてのつながりなど何らかのネットワークがかかりつけ医師の選択の背景となった。鈴木家や中島家の場合、かかりつけ医師的存在は基本的に親戚の白鳥氏であり、時には村内や近村で一時開業する医師であた。もっとも白鳥氏は、比較的近距離であること、血縁であることに加えて都市江戸で開業していた医師であったこともかかりつけ医として頼む背景となっていたのかもしれない。こうした意味で他の人々に比べて多少特殊ではあったかもしれないが、地域的な理由のみによらず、血縁・文化的つながり等の理由が絡み合って、患者はかかりつけ医師を決めていたのである。

(3)遠方の医師の存在とかかりつけ医師との関係

前項でみたとおり、鈴木家や中嶋家のかかりつけ医師的存在は主に白鳥氏であった。しかし、『公私日記』を見る限り、鈴木家や中島家がかかっていたのは、白鳥氏だけではない。先の表に現れるとおり、近村から遠方の医師に至るまでかかっており、患者の症状によって医師替えが行われている。本項では、遠方の医師選択について見てみたい。

比較的遠方の医師にかかる場合を見てみよう。表1中、鈴木家や中島家の人々がたびたびかかる遠方の医師は、主に日野土方・宮本秀悦・三ヶ嶋医師・伊藤玄珉である。前三者の土方・宮本・三ヶ嶋はともに眼科医を専門としており、これらの医師にかかるのは、主に眼科（時には外科）に限られることが解る。[27] 鈴木家では、筆者の平九郎の娘ため（のちにつねと改名）・息子の弥七（のちに芳蔵と改名）らがたびたび眼病を患っていたが、その八割がたが始めから白鳥氏にではなく、これら三者の眼科医の診療を受けている。[28] つまり、眼科・外科といった程度の専門的な治療が必要な場合、始めから通常のかかりつけ医師にはかからず、多少遠村であっても、専門医を求めていたということができる。近世後期には既に産科・本道（内科）・外科・口中科（歯科）・眼科といった専門分化がある程度されていたが、白鳥氏のように村の医師達はそれぞれ専門を持ちながらも、日常はあらゆる病の患者に対応していた。しかし、外科や眼科のような専門性を必要とする場合は、始めからかかりつけ医師と判別されて医師選択が行われていたということが言える。しかも、表中にあるように、その中でさらに専門のより良い医師を求めて医師選択をしていったのである。

一方、比較的遠方の医師で日記中、頻繁に登場する伊藤玄珉を見よう。伊藤玄珉（図1⑧）は、もともと浅草で開業し、天保十五（一八四四）年八王子の八日市場に転居した象先堂門人の蘭方医である。伊藤玄珉の

診療記載は、転居前の天保十五年、鈴木家・中島家親戚であり、八王子で絹商売を営む萩嶋氏と近隣の重症患者の診療記載から始まる。しかし、その活動の記録は弘化五（一八四八）年から嘉永年間である。[29] 伊藤玄珉が転居した理由については不明であるが、玄珉が浅草で活動していた時既に萩嶋氏と知り合いであることから何らかの縁で引っ越したようである。その後、鈴木家・中嶋家始め周辺の人々の診療が始まる。[30] 以下、中嶋隠居が落馬で大怪我の際の記事からかかりつけ医師と遠方の医師伊藤玄珉との関わりをみたい。

［史料1］[31]

嘉永四年六月廿四日

曇晴、中嶋隠居布田往途中青柳ニ而落馬大怪我之由通達ニ付、早速駈附候処、同所惣兵衛方江引取、いのうへ親子馬士善吉附添、青柳上谷保役人中詰合容躰見届候所、笠之儘逆ニ落馬頭上前江寄笠輪打込候、疵長弐寸余笠越ニ石を打込候疵弐ヶ所、外かすり疵弐ヶ所、失血弐三合、朝昼之間近所無尽ニ而馬士壱人当惑、一旦気絶之所やうやう惣兵衛方迄負入」候由之所気力慥ニ付一ト先安堵、下和田出口新屋敷山中之者共追々駈付、本田氏・竜作両人同時ニ参着服薬一剤之上疵所あらひ脚膏を打、夕時迄ニ駕籠ニ而引取、布田江ハ文吉を以通達之所、中島内方府中ニ而出会早駕籠ニ而帰宅、八王子江茂為知早々伊藤氏同道主人帰宅、西洋流之療養相加候所通気食気共無滞、夕刻使同道白鳥氏見舞診察、頭痛無之上ハ気遣ひなきよしニ而安堵、村内小前山中ゟ下不残見舞

嘉永四（一八五一）年六月廿四日、布田村へ行く途中、中嶋家の隠居は青柳村（現、国立市）で笠をかぶったまま逆さに落馬した。その結果、頭上前へ笠輪を打ち込み、長さ二寸余りの傷と、笠越しに石を打ち込んだためにできた疵二ヵ所、かすり傷二ヵ所、二、三合もの多量出血し、いったん気を失うほどの大怪我を負っている。このときの医師の関わり方は、まず、落馬した場所の隣村の本田氏と、竜作で投薬と疵の処置など初期の応急処置的治療に携わる。その後白鳥彝斎への診療依頼のかたわら、伊藤玄珉への診療を依頼している。そして先に到着した伊藤玄珉の「西洋流之療養」のあと、白鳥氏の診療を受ける。

ここで注目すべきは、まず、複数の医師の存在と遠方の医師伊藤玄珉にかかる経過である。ここでは、かかりつけ医師を含めて計四名の医師の診療を次々に受けている。一人の患者に対して複数の医師達が同じ日に診療を行う様子はこの例以外にも見られるため、この時期の柴崎村周辺では特別な方法ではなかったことがわかる。しかも、応急処置は地元の医師に頼み、その後に伊藤玄珉の往診を頼んでいることを考えると、重症の怪我の場合は遠方の医師の診療も求めること、さらに遠方の医師にかかる際は、近村の医師の診療後というステップを経て求めてゆくことが解る。

こうした八王子の伊藤玄珉への選択は、以上のような急な怪我のときに限らない。玄珉が八王子に移住した弘化五年以降、はじめから伊藤玄珉に直接かかる様子もみられるが、以上のような段階を経て玄珉にかかることも多い。表2は伊藤玄珉に診療依頼するまでの過程の例である。例えば天保十五年持病に罹った萩嶋氏の場合、日野の育斎・拝島医師東雲へと転医したあと、伊藤玄珉の診療を受けている。また、弘化五（一八四八）年痢病に罹った鈴木家の息子準三も、日野の育斎による診療の翌日から、玄珉への診療を決定している。[32] つまり、眼病等専門的な治療を受ける時以外については、患者達はある程度の病状の悪化や急を要するときに、求めて外に出てゆく傾向があることをあらわしている。

第二に、鈴木家・中嶋家のかかりつけの白鳥氏と伊藤玄珉の関係である。［史料1］では両者共に近隣の医師による応急処置のあとに、同時に呼ばれており、周辺の医師やかかりつけ医師を頼みながら遠方の伊藤玄珉を求めることが日常的に行われていたことをあらわしている。しか

表2　蘭方医伊藤玄珉への診療依頼の過程

年	月	患者名	病気・症状	経　　過
天保15	8	榎戸病人	とても不治	8／15日夕方白鳥氏の診療。転医の内談→ 9／14荻嶋見舞の医師の見舞→9／26追々重態→9／27伊藤玄珉の見舞→10／1死去
天保15	9	萩原殿	御持病	9／11昨日日野育斉の診察。今日拝島東雲の診療依頼のつもり→9／13伊東玄朴高弟の懇意により診療依頼→9／14医師の見舞→9／27伊藤玄珉の見舞
弘化 5	6	中嶋母	食傷	6／14白鳥氏の見舞→6／16安服療治のため八王子より按摩を呼ぶ→6／18白鳥氏の見舞→6／19八王子より按摩を呼ぶ→6／22白鳥氏の逗留→6／25昨夕白鳥氏の見舞，追々煩悩につき明日伊藤玄珉を招くつもり→6／28伊藤玄珉の診察→7／1白鳥氏の見舞→7／16白鳥氏の見舞，追々順快→7／22床上げ
弘化 5	8	平準三	痢病之由	8／3痢病之由→8／4日野育斉の治療→8／6　4日夜極めて重く，昨今少々づつ快方→8／7病気急変，余症発し一旦絶気になる。日野安積育斉の見舞，高幡山御籤の方角に任せて伊藤玄珉の診療決定，診療→8／8伊藤玄珉の診察→8／9伊藤玄珉の投薬→8／12少々づつ快方→8／18昨日より快方→8／22又々不快→9／4昨夜伊藤玄珉見舞→9／15病気全快，床上げ
嘉永 2	6	白鳥妻（白鳥さえ）	時候	6／10去る7日から引きこもる→6／19伊藤玄珉の診療・染谷潜竜子立ち会い→6／20伊藤玄珉の見舞→6／23明日伊藤玄珉への見舞い依頼→7／4追々順快
嘉永 3	2	鈴木芳蔵	眼病	2／3石田へ診療受けに行く→2／6伊藤玄珉の診療→以後表3参照
嘉永 3	6	井上氏	熱気	6／1両3日前から取臥，八王子伊藤氏見えず→6／3昨日伊藤氏下剤用いる→6／5白鳥氏の見舞，伊藤氏と案法違いのため，小田分細野氏へ転医の相談→6／7去る5日から追々順快→5／10追って順快
嘉永 3	6	中嶋隠居	落馬による大怪我	6／24本田氏・竜作の診療，伊藤氏の診療，白鳥氏の診療→6／26伊藤氏の見舞→6／27・28小河内温泉で薬湯→6／29追々順快，伊藤氏見舞→7／4小河内温泉で薬湯→7／13帰宅

立川市教育委員会編『公私日記』第8～16冊（天保15～嘉永6年）（立川市教育委員会，1972～83年）より作成。
※　始めから伊藤玄珉の診療を受けているもの，伊藤玄珉診療の後江戸へ赴く者については「内容」は除く（表3参照）。

し、ここで興味深いのは、白鳥氏は漢方医であり、伊藤玄珉は蘭方医であることである。患者にとって蘭方医伊藤玄珉の存在は、「西洋流の療養相加候所……」という点から、いつもとは違った珍しい、あるいは新しい西洋流（蘭方）の治療を行う蘭方医への関心が伺える。しかし、最終的にはかかりつけ医師である白鳥氏の「頭痛無之上ハ気遣ひなきよし」という見立てに対して安堵していることを考えると、この場合、漢方医・蘭方医という判断によって医師を判断しているのではない。むしろ、遠方の良い医師を求めつつ、かかりつけ医師も求めていたことがわかる。

小　括

以上、第二節で見てきたことをまとめる。近世後期のこの地域には医師が多く、患者達は症状や容体に合わせて医師を選ぶことができる状況になっていた。複数の医師にかかることも頻繁であった。彼らには通常かかりつけ的な医師がいた。かかりつけ医師については既に先行研究によって指摘されていることであるが、その決定の背景は、近村という距離的な背景のみならず、血縁や文化関係などによって左右されるものでもあった。鈴木家・中嶋家の場合はこれが血縁関係によるものであることが大きかったのだろう。しかし、眼病・外科といった専門を必要とする病や、症状の悪化によっては、この限りではなく、遠方の専門医や医師を求めていった。

専門医以外にこの地域の人々が求める遠方の医師は江戸出身の蘭方医伊藤玄珉であった。そこには江戸からきた、漢方医師とは違った新しい医療を行う医師への関心が伺える。しかし、かかりつけ医師との関係で言えば、重病・重症などでこの医師が呼ばれた場合、かかりつけ医師も同時に呼ばれることがあり、かかりつけ医的存在のバック・アップは必要とされていた。患者側は、かかりつけ医師にかかりつつ、その時々の状況に応じて判断し、専門医や遠方の医師たちの診療も求め、併用していたのである。

❸江戸の医師への選択

(1)江戸の医師への選択

以上、かかりつけ医師と遠方の医師への選択について見た。しかし、この地域の人々の医師選択はたんに遠方の医師を求めるのみならず、幕末期には江戸やさらに遠方の医師に目を向ける。では、どのような時にこの地域の人々はこれらの医師を求めていったのだろうか。本節では、これらの医師にかかる過程と背景について見てみたい。

江戸の医師選択については、天保八（一八三七）年の時点で既にあったが、この日記の中で江戸の医師にかかる記載が増えるのは、弘化・嘉永以降である。[33] この弘化期以降は、既に多くの江戸の蘭学塾が開学し、多摩地域を含め多数の入門者がいた。蘭学塾が興隆していた時期である。[34] この時期であったことを考慮に入れながら表3を見てみたい。表3は、この村の人々が診療を求める江戸の医師と患者が医師にかかる過程である。特徴的なことは、ここに現れる江戸の医師の大半が伊東玄朴といった蘭学塾師匠や大槻俊斉など種痘所建設に関わる医学史上の重要人物、松村養全等藩医クラスの蘭方医、蘭馨堂（吉田長淑の塾）門人の畑

表3　江戸の医師の診療

年	患者名	身分	病名	医師名	内容
天保 9	上布田上島氏娘	上布田村名主の娘	疱瘡	(江戸の医師)	6／11患者死去のため，診療なし。
天保15	萩嶋氏	商人	不明	伊東玄珉	9／13中島長兵衛，萩嶋氏病気のため伊東玄朴高弟懇意につき頼み→9／14見舞→9／27浅草医師伊東玄珉の見舞い，診察。（＊この時伊東玄珉は浅草の医師）
弘化 3	萩嶋彦太郎	商人	病気	伊東玄朴	8／20江戸で逗留治療，弘化4年逝去
弘化 4	源五右衛門	砂川村名主	眼病	伊東玄朴	2月中から伊東玄朴へ出療治，当月上旬帰宅
弘化 4	力藏	宿屋	病気	畑中文仲	4／25江戸へ出府，治療受ける積もり
弘化 5	萩嶋分家主人	商人	病気	——	6／7江戸で逗留治療中死去，江戸での病中入用等に金60両余りかかり，親戚で家財の売り払い相談→6／17同様の相談
嘉永 2	萩嶋たけ	商人の妻	病気	伊東玄朴	3／22伊東玄朴の療治が受けられるよう取計らい頼状作成，診療→3／23伊東玄朴へ訪ねたが留守→3／25伊東玄朴の見舞，こころ永に治療を受けるよう主人・親子・当人に書状さし遣わす→4／1昨日伊東氏の見舞，4・5日前より順快の由
嘉永 3	白鳥内方（白鳥さえ）	下布田村医師の妻	肺病	織田研斎・紀州藩医松村養全・（村松町和田□老）	2月上旬から病気で伊藤玄珉の診療，2／20診療→3／4塾頭織田研斎の療治→3／9松村養全の診療→5／6松村養全の六度目の見舞い→5／15松村養全の見舞い依頼，伊東玄朴へも診療依頼→5／17松村氏の往診なし→5／18・20・28日伊東玄朴の診療→6／8織田研斎の診断→7／27伊東玄朴見舞→8／3村松町和田氏に診療依頼，古方家のため診療受けず

嘉永 3	鈴木弥七	柴崎村年番名主の息子	眼　病	伊東玄朴	2／3眼病につき石田(土方医師)の診療→2／6伊藤玄珉が来たため診療依頼・診療→3／14三ヶ嶋・間島・伊藤の診察後，見立てが軽くなかったため，江戸の伊藤先生(伊東玄朴)の受療決定→3／15弥吉に改名，布田より添え書きを頼み，伊藤亥臥老へ渡す手はず→3／20伊藤氏(玄朴)の診療，1ヶ月に1度ずつ診療を受けることを申しつけられる→23日伊藤氏(玄朴)の診察→4／3江戸より帰宅，追々順快也→5／20江戸での積もり，22日に江戸へ出府→6／8快方，服薬50貼もらい帰宅
嘉永 3	太兵衛	宿屋	肺　病	伊東玄朴	5／20八王子伊藤玄珉→下谷伊東玄朴へ→5／23江戸に逗留，薬用→5／27塾生の代診→7／3病気快方帰宅→7／8又々翌日から江戸へ
嘉永 5～6	中嶋次郎兵衛	柴崎村年番名主	肺　病	伊東玄朴・伊東玄朴の弟子(織田研斎ヵ)・(加藤氏の薬)	5／1下谷伊東氏へ治療依頼として出府，以下表4参照
嘉永 6	中嶋ふく	柴崎村年番名主の妻	病　気	大槻俊斎	8／20種村祐眠の診療の後麹町へ出る→8／23麹町に逗留，下谷で蘭家大槻俊斉の診療→9／12源次郎・弥七と共に帰宅
嘉永 6	源次郎	不　明	不　明	大槻俊斎	8／23江戸に逗留，大槻俊斉の診療→9／12中嶋内方・弥七と共に帰宅→9／16再療治で江戸へ
嘉永 6	中嶋ふく	柴崎村年番名主の妻	悪血之滞	大槻俊斎	6／17白鳥氏代診(種村)祐眠の診療→8／20麹町へ出る→8／23麹町に逗留，下谷で大槻俊斉の治療受ける→9／12帰宅
嘉永 6	巴　屋	柴崎村在郷商人	腫れ物	——	12／8腫れ物又々再還の為明日江戸出療治の積もり→11日出発
嘉永 6～7	鈴木弥七	柴崎村年番名主の息子	眼　病	伊東玄朴	8／29祐眠の治療後伊東玄朴の診療へ出立→9／12中嶋内方・源次郎と共に帰宅→9／16再療治のため，出立→10／8追々こころよく医師より許しが出て在所(自宅)療養のつもり，昨夜帰宅→11／13石田の診療受けに行く→12／23江戸へ出府→帰宅→嘉永7年2／21江戸へ→4／1江戸より帰宅→7／18江戸へ出府
嘉永 7	中嶋ふく	柴崎村年番名主の妻	病気再発	大槻俊斎・立野立長・(米沢町林)	6／6病気再発につき布田へ行く，それより麹町へ出，大槻俊斉の受療を頼みとして駕籠出立→6／11大槻先生を招き一診を受けた上，米沢町林先生その他へも診察を受ける積もり→12日，大槻先生の診察が白鳥氏と同案の為，林先生の診療は断る→6／15平九郎が大槻先生の薬方書を布田へ渡す→閏7／12立野立長に受療の積もり
嘉永 7	白鳥雄次郎	下布田村医師の息子	怪　我	小伝馬町名倉・下総佐倉町佐藤泰然	4／17名倉受療，江戸に逗留→5／27名倉の療治不接取により江戸出立，下総佐倉町佐藤泰然方へ治療を受けに行く→6／4早速少々快く，帰宅
嘉永 7	押立柳屋代忠介	不　明	中　風	大槻俊斎	5／15江戸詰めのところ11日に急に発病し大槻俊斉治療，外神田万佐に逗留，昨夜帰宅
安政 2	中嶋ふく	柴崎村年番名主の妻	不　明	磯野文鼎	10／8お玉ヶ池磯野文鼎へ一診，調剤を受け取る
安政 3	鈴木つね	柴崎村年番名主の娘	眼　病	相沢宗貞	4／4眼病で灸治，相沢宗貞老の診療→4／13眼病で出府ヵ
安政 5	鈴木準三	柴崎村年番名主の妻	肺　病	伊東玄朴・大槻俊斎	6月下旬から麹町岡部候藩医の隠居で，当時八王子に居住していた井口永達の診療→順快→8月下旬から元気増す

立川市教育委員会編『公私日記』第1～20冊(天保8～安政4年)，(立川市教育委員会，1972～83年)より作成。

中文仲、接骨医として有名であった名倉氏等、江戸の中でもトップクラスの有名医師達である。[35] 実際は、時には弟子達が代診としてあたることもあるが、この地域の人々が選択する江戸の医師は、たんに大都市「江戸」に目が向けられているだけではなく、その中でも有名医師や蘭学塾師匠クラスの医師の情報を得、そうした医師の診療を求めるほどの状況になっていたといえる。

江戸の医師にかかる過程を見てみよう。詳細については、後の例で述べるが、表3中の経過欄にあるように、これらトップクラスの医師達にかかるには、先の伊藤玄珉の診療から更なる段階を経ている。この中には、江戸の医師の診療を通して江戸とのつながりができた患者が、その後直接江戸へ診療を受けに行ったと思われるケースを除き、いくつかの段階を経て江戸の医師を求めている者が多いことが解る。たとえば、嘉永三（一八五〇）年の白鳥さえは、肺病治療の際、伊東玄珉の診療の後に江戸詰の紀州藩医松村養全や象先堂塾伊東玄朴の診療を受けている。[36] 同年には太兵衛も肺病治療で伊東玄朴にかかりに行っているが、その前に伊藤玄珉にかかっていた。その後は、一時回復して帰郷するが、約十五日ののち、再度江戸への逗留治療に赴いている。[37] では、どのような中で人々は江戸の医師を選択していたのだろうか。次に肺病・眼病・怪我の患者三例から江戸の医師選択について見たい。

肺病患者の場合

表4は、鈴木家と共に年番名主を勤めた中嶋次郎兵衛の経過である。次郎兵衛は、八王子の商人萩嶋家の生まれであるが、平九郎の生家の中嶋家に養子入りした。つまり平九郎生家の義弟にあたる。次郎兵衛は、嘉永五（一八五二）年四月頃から肺病にかかり、翌六年二月までの間に様々な方法を用いている。[38] 医師の診療以外の方法については本稿では触れることができないが、表から寺社への代参・護摩炊き・千垢離・大山代参等の信仰・宗教的な様々な方法と共に、医師選択が並行して行われていることのみ触れておきたい。この間、医師に関しての記載は、伊東玄朴の診療についてから始まっており、伊東玄朴の診療を受ける過程について日記は何も記していない。そのため、このケースではどのような過程を経て（または経ないで）江戸の医師の診療に至ったのかは解らない。仲介についても記録からは解らないが、中嶋次郎兵衛の場合、生家（もしくは親戚）の萩嶋家と玄朴塾門人の伊藤玄珉は既に江戸で面識があり、最初に萩嶋氏を診療していること、鈴木家同様に白鳥氏をかかりつけ医的存在としていることから、玄朴にかかる以前に伊藤玄珉や白鳥氏の診療や紹介を経ている可能性がある。

中島氏は、基本的に伊東玄朴の診療やその門人による代診をうけつつ、白鳥氏や伊藤玄珉の診療も受けている。江戸から帰郷したときには白鳥氏や伊東玄朴門人の織田研斎・伊藤玄珉が代診と言うべき役割を担っている。つまり、ここでも前節と同様、かかりつけの白鳥氏の関与は基本的に八王子の伊藤玄珉の時と変わらない。白鳥氏と中嶋氏は遠い親せきに当たるため、なおさら白鳥氏が関与したと考えられるが、江戸の医師にかかる場合にも、やはりかかりつけ医師の存在は大きかったのである。

では、患者はこれら江戸の医師たちをどのように見て選択していたのだろうか。次に、江戸の医師に対する患者の見方を見よう。中島氏は「夜ニ入冨田ニ而転医其他之儀病人江昨今再々応進メ候得共、元来伊東玄朴極信心之上病体茂少々ツヽ快方ニ付、何分に茂外事こゝろ移り兼候に付、無拠当人之存意ニ任セ可申事ニ決心いたし候事」というように、伊東玄朴を極めて信じていた。しかし、平九郎はじめ周囲の人々は、転医を勧めている。さらに、伊東玄朴の「四月廿一日始而授療面会之由既ニ死相相顕れ一診之所弥以難症脳疲与申病ニ付、迚茂不治之旨被申聞、兼而無覚束心得居候得共今日之次第ニ而一同当惑野崎巴屋三人集会此後転医進メ」四月には既に死相があらわれ、とても不治という見立てにより、さらに心もとなく思い、患者を説得して転医させる試しに他の評判

表4　患者の経過と対処

年	月　日	医　　師	月　日	信仰・宗教・その他
嘉永5年	5月 1日	中島氏病気ニ付下谷伊東氏江治療頼与して今日出府	5月12日	中島氏占考与して去年中ゟ中藤新田清八方ニ逗留之観音信者榎戸隠居同道相越，観音籤考之上直ニ出府のよしニ而下布田すミや江向出立也
	5月 7日	中島出府先ゟ返書さし越之所，容体相変義無之候得共，迚急之事ニ者療治行届かね可申，ゆるゆる療養可致との事也	5月13日	中島氏病気占考之書取弐通野崎氏ゟ書状相添さし越，日本橋西川安積光角神田新石町朝晴堂等也
	5月20日	冨田ニ而中島江面会之節両三日前ゟキナ剤ニ相成，都而快方之容体也	5月14日	中島水車之門未申ニ相当り松村穴蔵良相当り，いつれ茂凶方之所」取潰方角吉凶難相決に付，布田原氏江相談之上決定いたし度よし巴屋申聞に付，午後ゟ中島居屋敷廻りゟ居宅其外建もの方角相改之事
	5月21日	冨田ニ而中島江見舞(中略)夜ニ入冨田ニ而転医其他之儀病人江昨今再々応進メ候得共，元来伊東玄朴極信心之上病体茂少々ツヽ快方ニ付，何分に茂外事こヽろ移り兼候に付，無拠当人之存意ニ任セ可申事ニ決心いたし候事，夫ゟちヽ清江帰り止宿之事	5月15日	なかしま家作其外絵図清写
	5月27日	中島氏昨夜帰宅かうし町ゟ高井戸断布田ニ而日中をよけ通し，駕籠ニ而着也	5月16日	中島家宅絵図巴屋江渡，明日布田往候積也
	6月 3日	二日朝下谷伊東氏江罷出中島主人病気治不之見込相尋候処，四月廿一日始而授療面会之由，既ニ死相相顕れ一診之所弥以難症脳疲与申病ニ付，迚茂不治之旨被申聞」兼而無覚束心得居候得共，今日之次第ニ而一同当惑，野崎巴屋三人集会此後転医進メ方手島松段并中村跡之取計向等評之内	5月17日	中島氏病気平癒祈与して高幡山江護摩相願，同山庭作目論見与して宇右衛門同道夕刻帰ル
	6月 6日	中島病気重体之由ニ付重而出療治差止度候得共迚茂申間敷見込ニ付，伊東氏ゟ書状を以暑中ハ田舎ニ而保養いたし，其後内頼与して出府可罷，尤其間之手当之儀ハ玄珉賢斎両人江得与可申付旨病人方江直書投し被呉候やう内頼与して源次郎今未明出府也	5月18日	中島氏病気見舞与して伊奈林相越松村泊普済寺納所病気者迚も不治之由，八王子伊東氏ゟ伝言に付其段武山江申通候事
	6月13日	中島氏病気容体茂宜且玄珉老診察いかにも不治之症与者不相見に付，一ト先下谷先生招待一診為致候上之事与評決之事	5月19日	中島氏病気平癒祈高幡山護摩札平ゟ届ヶ越ニ直ニ中島江送ル，歓喜天御札者高幡山主御見舞のよしニ而被差越候事
	6月15日	中島病気平癒祈与して丸八・わたや・丸山三人ニ而大山江参詣之由玄珉見舞ニ付，伊東氏招待之書状相頼，明日松村文蔵出府為致候事	5月22日	浅草成田山参詣富田江見舞候所容体茂宜敷(中略)廿五六日頃一ト先帰宅との事
	6月21日	下谷伊東玄朴老払暁江戸出立早駕籠ニ而布田府中織田氏等江立寄り，八ツ時頃中しま着昼夕夜三ヶ度診察止宿，八王子玄珉老先着待受同宿也	5月24日	中島氏建立宝匡塔之儀武山本堂前大庭左之方江地形いたし可申所，当年者主席年廻り闇暗剱殺ニ相当り候由ニ付，猶又志村様江問合之上可相定旨ニ而延引
	6月22日	両伊東氏七ツ時出立，松村久蔵薬取兼送り	5月28日	中島宝匡塔之儀東ハ角方悪敷に付，両家墓所之中央江建立之積取究候事
	7月12日	八王子玄民此節病気ニ而布田白鳥氏中しま江見舞診察之上下谷江容体書いたし，四花関門灸点いたし候事	6月 1日	中しま氏宝匡塔地搗賃人足六人ニ而今日始ル
	8月 4日	中島病気診察与して布田白鳥氏夕刻相越	6月 2日	宝匡塔地搗午前相済賃人足五人之内弐人午後ゟ築山其外取片付

嘉永5年	8月22日	中島病気同変に付転医可罷よし，先日八王子玄珉に申に付やうやう転医之事病人承状ニ付，夫々医師取究中下谷加藤様ゟ出候施薬之儀四ッ谷麹町辺ニ而肺□病人巧験之もの多分有之よしに付，明日下谷江薬取便文蔵さし遣願書為差出，二七之当日かの御施薬頂戴弐三廻り服用之上転医相定可申事ニ相談決
	8月28日	中しま氏病気に付下谷加藤候御施薬頂戴今日ゟ服薬始ル，初日丸薬壱粒夫ゟ一日壱粒まし一廻り弐十八粒包外薬灸針一切禁し魚鳥肉酒油気禁物なり
	9月15日	中島氏加藤候寄薬三廻りニ相成候得共巧験無之に付，又々伊東玄朴呼迎可申事ニ決定，是ハ病人始終執心去かたきに付而也，四五日已来痰咳多くかろしからす，一ト筋ニ伊東ニ任セ置候ハヽ全快いたし可申との当人之迷ひ是非なし
	9月17日	中島氏療治之儀，再度伊東氏ニ相頼候積ニ而今日玄珉江頼状并容体書認させ候事
	9月20日	中島氏療治に付，伊東玄朴招請与して文蔵昨日出府也
	10月15日	下谷伊東氏御弟子昨夜中しま江被相越，今日逗留に付八王子伊藤氏茂相越ス
嘉永6年	1月14日	中島病人当月ニ入容体悪敷追々衰弱之容体，伊東先生請待之所，此節旦那御姫様御大病ニ而昼夜詰切他出相成兼候由ニ而，塾頭織田賢斉昨夜相越八王子玄珉立会転法いたし候事
	1月20日	寒気旁次郎兵衛容体追々衰弱，今日なと飲食服薬共殊之外難渋之由ニ而追々減少するといえとも平常之気質，且病症ニ寄勝気ニ而便所茂独歩，昼夜之看病茂家内壱人而己決而他之人枕上ニ不置，自他始而困り候事
	1月22日	伊東玄朴老夕刻中しま江着，病人診察之上止宿也
	1／晦日	中島病人追々重体ニ付，今昼見舞候所遺言有之不生之覚悟厳重にして長病与者乍甲壮年ニ者珍事与感伏也
	2月11日	病人今日不食尤玄珉調薬咳ニ逆し之容体也，今戸家内加看病候
	2月15日	中島病人追々重体，四五日前ゟ飲食不通
	2月17日	八王子伊藤氏中しま江相越，病人付添与し而止宿
	2月18日	申上刻ニ至正念往生也

6月 8日	中島氏転医之儀成田山御圖之吉凶ニ随ひ可申当人ゟやうやう申出右内談与していな野崎市ゟ廻り松村止宿
6月 9日	宝匡塔建方済
6月11日	早朝浅草成田山江参詣中島氏転医之儀心願之上(圖)相伺候処八十番之大吉也
6月12日	浅草江参詣中しま病気平癒之祈いたし
6月15日	中島病気平癒祈与して丸八・わたや・丸山三人ニ而大山江参詣之由，玄珉見舞ニ付伊東氏招待之書状相頼明日松村文蔵出府為致候事
7月15日	宝匡塔開眼也
10月10日	中しま病気平癒祈与して高幡山参詣之上帰宅
1月13日	松村清七義主人次郎兵衛病気平癒祈与して去秋中・百日塩たちいたし，右宝典旁当春初荷出候後成田江三七参籠断食いたし度暇願に付，野崎一同種々異見差加候得共正直一遍之決心ニ不思止に付，棚沢文兵衛倶々暇願遣し彦八供ニ差添，今朝下総江向出(以下略)
1月16日	中しま氏病気平癒祈与して横町友吉義成田山参詣出立，清七義十四日所着，一廻り断食願済差添遣候，彦八帰ス
1月17日	中しま病気平癒祈与して村中惣出鎮守両社ニ而千度詣，夫ゟ川原江至り大山石尊宮江万垢離を捧く
2月 1日	松村清七二廻り断食，二十八日結願，飛脚彦八同道ニ而今夕帰店ニ付伊奈林一同中島主人江咤いたし，病床江目通り相済，店江帰ル

立川市教育委員会編『公私日記』第15冊(嘉永5年)(立川市教育委員会，1981年)より作成。
※記載中の文章は原文に準じた。但し，病については直接関わりのないもの，病人の見舞のみ記載については省略した。

の良い下谷加藤氏の薬を用いることにする。結果は変わらず、「中島氏加藤候寄薬三廻りニ相成候得共、巧験無之に付、又々伊東玄朴呼迎可申事ニ決定是ハ、病人始終執心去かたきに付而也、四五日已来痰咳多くかろしからす、一卜筋ニ伊東ニ任セ置候ハヽ全快いたし可申との当人之迷ひ是非なし」と結局は患者の執心さりがたきにつき、伊東に任せれば全快するという患者の強い意向により、是非なく（しかたなく―筆者注）伊東玄朴の診療依頼を決めている。つまり、ここから患者の経過による周囲の人々の医師へのシビアな見方が解る。結果的には患者本人の強い心願により伊東玄朴へ再度診療することになったが、患者や患者をとりまく人々の意志によって、有名医師ですらシビアに判断されていたのである。こうした患者を取り巻く人々の伊東玄朴に対する判断の背景には、この三年前に同じ病気で伊東玄朴にかかった白鳥医師の妻さえが、中嶋氏同様に回復の見込みがないと玄朴に診断され、治療の甲斐無く亡くなったことも影響しているのかもしれない。しかし、この時期の伊東玄朴は象先堂の塾頭であるのみならず、種痘の成功によりその名を馳せた時期であった。患者はただたんに「江戸の有名な蘭方医」を求め、江戸を求めていたわけではなかった。江戸の有名な蘭方医であっても、医師の見立てや患者の状態によっては否定されたのである。

眼病患者の場合

次に、眼病患者の例から眼病の場合の医師選択についてみよう。鈴木芳蔵（弥七に改名）は、嘉永三（一八五〇）～七（一八五四）年の間にたびたび眼病にかかる。眼病の場合、完治しないこともあったためか、長く患うが、芳蔵の眼病も同様に回復と悪化を繰り返した。眼病のような専門的治療が必要な場合、前節で見たように、初期の段階からかかりつけ医師ではなく、遠方の名の知れた近村の専門医師の所に一定の逗留治療に赴いているケースが少なくない。このような場合、江戸の医師にはどのような過程を経てかかることを決めていたのだろうか。以下に嘉永三年、同六年、七年の医師選択に関する一部分から見たい。

［史料2］[39]

嘉永三年

二月　三日　よし蔵眼病ニ付昨二日石田江参り候処、コクシヤウ眼之始メのよし、医師申越ニ付、松村文吉江用薬其外手当看病相頼

六日　（前略）八王子伊藤氏相越ニ付、芳蔵ため眼病診察相頼候処、いつれ茂さしたる事なきよし

三月十四日　芳蔵義八王子江遣し、三ヶ島出張、間島・伊東三人江診察為致候処いつれ茂見立不軽に付、江戸江さし出、伊藤先生之診察為受候事ニ決候事相

十五日　芳蔵事弥吉与改名（中略）布田ゟ添書相頼伊藤亥臥老江遣し候手筈也

廿　日　芳蔵改名弥七義伊藤氏診察之所、冷を引込候故之由ニ而至而軽見立、服薬三拾貼水薬投剤一弐ヶ月ニ壱度ツヽ召連候やう被申付、冨田江預ケ、廿日出之内又壱度診察受召連帰り可申よし

廿三日　弥七義再ひ伊藤氏江召連候処、シャコサイ湯七貼兼用相渡（以下略）

四月　三日　弥七江戸ゟ帰ル、眼病追々順快也

廿四日　弥七眼療廿日出、今日帰り、順快之由ニ而服薬五十貼投剤

五月廿二日　松村弥七眼療与して忠兵衛馬ニ而冨田江向出府

六月　八日　弥七義眼病快方（中略）服薬五十貼伊藤先生ゟ被相渡昨日帰宅

嘉永六年

八月廿九日　眼療之ため弥七義忠兵衛馬ニ而伝馬町冨田江遣、

伊藤玄朴江授療之積也

十月　八日　追々こゝろよく医師ゟ茂ゆるし出、在所ニ而療養之積ニ而昨夜帰宅

十一月十三日　眼療之ため忠兵衛馬ニ而弥七出府

十二月廿三日　眼療与して布田泊ニ而弥七出府

嘉永七年

四月　朔日　弥七眼療江戸ゟ帰り（以下略）

七月十八日　弥七眼療与して出府

嘉永三年二月から眼病を患った芳蔵は、初期の段階で石田村の土方氏の診療を受けコクショウ眼と診断される。その後鈴木家に立寄った伊藤玄珉に診療を頼んだところ「さしたる事なき」つまり、軽症という見立てであった。しかし、その後病状が進行し、最終的には伊東玄朴の診療を求めることとなる。芳蔵が伊東玄朴の診療を受けるに至ったのは、三ヶ嶋・間島・伊藤玄珉の診察の結果が初期の伊藤玄珉の見立てとは異なり、どれも「見立不軽に付」という判断によってであった。眼科の場合は、長引き、完治せず再発することが多いこと、比較的他出することが出来ること、効果がわかりやすいことから、一定の治療後の状態によって医師を見極めたが、この芳蔵の場合も江戸の医師にかかるまでは様々な医師の診断を経、その上で、伊東玄朴への医師選択が行われていたことがわかる。

また、弥七の妹、鈴木ためがたびたび眼病を患ったときも、眼科医の石田村土方氏のあと、拝島の田子栄三を受け、さらに青梅の眼科医宮本秀悦にかかる。そのあと、木挽町の相沢宗貞医師にかかり、再び宮本秀悦にかかるという同様の過程を経る。[40] ここでは、芳蔵同様の江戸の医師にかかる過程は同様であることがわかる。さらに、症状の軽重により江戸の医師と近村の専門医への頻繁な転医を繰り返すという形態がわかる。つまり、眼科の場合、江戸の医師にかかる過程は、村の医師の診療を経た上でと言う点が他の病気と同様であった。しかしその状態に併せて江戸の医師と近隣の医師の診療を受けていた点では異なることがわかる。

(2)更なる遠方の医師への選択

以上、江戸出が頻繁に行われていたが、この医師選択は江戸に留まらず、さらに広がってゆく。次に上布田の白鳥医師の息子裕次郎が怪我した時のケースから、遠方の医師選択について見よう。

[史料3][41]

嘉永七年四月十七日

布田裕次郎、江戸ゟ帰り幸便、冨田庄兵衛ゟ甚右衛門一件書状さし越、当時名倉授療小伝馬町なへ甚逗留ニ付、根小屋弥兵衛出府、同居ニ付同人同介秀吉供吉蔵并松村順蔵岩城屋出療治ニ付同道（以下略）

同年五月廿七日

布田雄次郎儀、名倉之療治不接取迚去ル廿一日江戸出立、下総佐倉町佐藤岱全（泰然）方へ療治罷越候由ニ而、中島隠居為見舞、今朝布田往

同年六月四日

順蔵布田ゟ帰宅之所、先日本家ゟ周吉を以佐倉江さし遣候途中、雄次郎帰りニ逢同道ニ而帰宅、佐藤岱全の治療ニ而早速少々快く五六歩ツゝも歩行相成、最早引越療治ニ不及此通り手当いたし可申段附添之医師江申含さし戻候由ニ而、外料与眼療者関東一之名医之よし也

上布田の白鳥裕次郎は、嘉永七（一八五四）年五月二十七日、足の不具合（怪我ヵ）で江戸の名倉医師まで診療へ出る。しかし、その結果「療治不接取」との判断により、佐倉町（現、千葉県佐倉市）の佐藤泰然方へ診療を受けに行き、約一週間後の六月四日には歩けるほどに回復して帰郷する。当時佐倉藩医を務める傍ら、佐倉で蘭学塾「佐倉順天

堂」を開学し、蘭方医として非常に評価されていた佐藤泰然への評価は「外科と眼科では関東一の名医」であった。

名倉氏も当時接骨医として大変有名な医師であった。有名な医師でさえ患者の経過によっては医師替えをされたことは先の中嶋氏の例から見たが、ここではその選択先が大槻俊斉や伊東玄朴といった既に患者の家とつながりのある医師ではなく、江戸を通り越してさらに遠方の評判の良い医師を求めている点に注目したい。つまり、外科といった専門性の必要とされる場合、始めから遠方や江戸の専門医を求めるにとどまらず、更に評判の良い医師を求めて出てゆく状況になっていたのである。

(3)人々の医師に対する見方

以上、肺病・眼病・怪我、三例の患者から江戸・及び遠方の医師選択について見た。彼らは、かかりつけ医師を求める一方で、状態の悪化に伴い江戸や遠方の医師を求めていった。以上で見た江戸や遠方の医師達は、いずれも当時江戸で有名な蘭学塾の師匠、またはその門人や藩医といった医師達であった。ここから、治療を受ける人々は江戸や遠くの医師を求める場合、有名医師を選んでいたことになる。その中の蘭方医が占める割合も多い。では、患者や患者を取り巻く人々は、これらの医師たちをどのような判断で選んでいたのだろうか。この点について、次の例から見たい。史料4の中島ふくは、前節で例に挙げた中島次郎兵衛の妻であり、鈴木平九郎の妹である。ふくは、前年の嘉永六（一八五三）年から「悪血の滞」と血の道関係の病気を患い、既に大槻俊斉の診療を受けている。[42] 翌年「病気再発」として再度大槻俊斉にかかるが、その時の記載を以下から見よう。

［史料4］[43]

嘉永七年

六月十一日　（前略）かうし町江立寄、中島ふく容躰見届候処平臥に付、明日大槻先生相招一診受候上、米沢町林先生其外江茂診察受可申積談置

十二日　今日大槻先生診療之処、布田白鳥と同案ニ而薬法相違いたし候よ志、右ニ付先ツ大槻之療治受可申趣ニ付、林先江者請待なし、松村帰使病人様子中しま江書状遣

十五日　晴両三日已来暑つよし、周介八十八同道帰村かけかうし町江立寄候処、中しま病人少し者こゝろよき姿子、然共中々急ニ快復与申事ニ無之に付、ちゝ利姉江看病頼置、大槻先生薬法書布田江相渡候所、同法之由ニ而先日相違候」かうし町ニ而心得候者、漢蘭法剤之間違也、夕刻帰村

ここでも、再発の初期の段階ではかかりつけ医師白鳥氏にかかっている。患者が江戸に出たあとには大槻俊斎を受けた上で、米沢町林氏へ診療を依頼しようとしている。しかし、蘭方医大槻俊斉の診療を受けたところ、白鳥氏と同案（同じ見立て―筆者注）で薬法が異なったため、その後大槻氏の療治を受けることにする。その三日後、平九郎は帰村がけ白鳥氏へ大槻俊斉の薬法書を持って行くと、その薬法は白鳥氏と同法とのことだった。平九郎は先日の薬法は麹町では違うと思っていたが「漢蘭法剤之間違」であった。つまりこの場合、漢方も蘭方も結局は同じような方法を用いていた。この白鳥氏・大槻俊斉の関係から、漢方医と蘭方医が共存の関係であったことが解り、興味深い。しかし、ここでは患者側からの大槻俊斉への選択は、蘭方医であったという理由ではなく、大槻氏の診断の結果が白鳥氏と見立ては同じで薬方が異なったためという点に注目したい。つまり、患者の医師選択背景は江戸の医師が蘭方医であるかどうかというよりも、むしろかかりつけ医とは異なった判断をする医師という理由によっていたのではないだろうか。

以上、江戸の蘭方医師に対する見方を見てきた。『公私日記』には蘭方医選択の背景や評価についての記載がほとんど記されていないため、医師選択に関して蘭方医がどれほどの医師選択基準になったかは解らない。以上で見てきたとおり、江戸の医師の中でも蘭方医師が多数見えることから、人々の蘭方医への関心が江戸の蘭方医選択に反映されていたのかもしれない。しかし、鈴木家・中嶋家のかかりつけ医師的存在は漢方医白鳥氏であり、江戸の医師の診断に際しても最終的には白鳥氏へ相談していた。さらに史料1の伊藤玄珉に対する評価、日記中蘭方医への直接的な評価は記されていないこと、佐藤泰然へも「名医」という評価を下していることを考えると、彼らが敢えて蘭方医を選択していたわけではなかったとも思われる。(44)

では、なぜこの地域の人々が江戸の医師にかかる場合、蘭方医が際立って見えるのだろうか。それには、この地域の伊東玄朴や門人のつながりが考えられる。先に見たように、近世後期、江戸で開学した蘭学塾の興隆とともに、この地域からも蘭学塾へ入塾する者が増えていった。この地域では少なくとも六名の伊東玄朴入門者がいた。その中には、後に塾頭になる府中六所宮禰宜家出身の織田研斎と、研斎の弟で伊東玄朴の養子となる研斎伊東貫斎、多摩地域の隣村には同じく伊東玄朴の養子となる伊東方成等が含まれており、伊東玄朴と深いつながりを持つ医師が多いことがわかる。この日記の江戸での診療記載が増える弘化年間以降は、これらの医師たちが村に帰って活動をしてゆく時期であった。また、この地で一時期診療活動を行った伊藤玄珉も象先堂出身者である。一方、伊東玄朴門人以外でも、大槻俊斎などはともに種痘所建設に携わった者である。(45) 多摩地域と伊東玄朴・及び門人との関係の深さについては、既に指摘されてきているが、(46) こうした師弟関係や医師のネットワークが多摩地域の中での蘭方医選択に影響していたのではないだろうか。

小括

以上、本節で見てきたことをまとめる。まず、本節で取り上げた(1)(2)の三者から、患者の経過により医師が判断され、治らない場合には遠方の評判の良い医師が求められた。弘化期以降、この地域の人々の病の経過が思わしくなかったとき、さらなる診療を求めた先は江戸であった。地元の医師のあとに診療を乞うという段階を経て選ばれた江戸の医師たちは、その多くが江戸の中でも評判の（有名な）医師たちであった。しかし、その経過によっては江戸の有名医師であっても患者を取り巻く人々によって評価・否定され、さらなる医師が求められた。医師の見立てと患者の経過から、家族達が伊東玄朴を心もとなく思った中嶋次郎兵衛の例は、それを表している。さらに、眼病患者や怪我など江戸の専門医でも対応できない場合は、江戸を通り越してさらに遠い名医（専門医）を求めていた。医師の専門分化については既に指摘されているが、先の白鳥医師息子の例は患者側からの医師選択における専門医への評価と実態を顕著に表している。

鈴木家・中嶋家をはじめ、人々がかかる江戸の医師には蘭方医も多かった。それは、蘭方医に対する評価もあったのかもしれない。しかし、村民達はあえて蘭方医を選んでいたわけではなかったことが考えられる。ここに登場する蘭方医が伊東玄朴門人やつながりのある医師が多かったのは、この時期のこの地域と伊東玄朴・伊東玄朴門人との関係の深さ、及び江戸の医師同士の交流によるものが背景としてあった可能性が考えられる。

❹江戸の医師選択の背景

以上、患者側からみた医師選択について見てきた。弘化期以降、江戸の医師たちの診療は頻繁に行われるようになっていた。では、この状況

はどのような背景で可能になったのだろうか。最後に、これらの医師選択を可能にした背景について考えてみたい。

まず、前節で見てきたように、時期的背景と江戸の医師とのつながりである。先に見た通り、この地域の人々の江戸での治療が頻繁になる弘化期・嘉永期には、江戸の蘭学塾入塾者が増加し、修学後開業する時期であった。伊東玄朴や大槻俊斉といった江戸の医師達と、この地域の人々がどのような背景で交流が始まったのか、明確な背景は解らない。しかし、浅草で開業し、その後八王子に越した伊藤玄珉は鈴木家・中島家の親戚である荻嶋家と交流を持っていた。また、嘉永三（一八五〇）年には象先堂門人織田研斎出身の織田家や伊藤玄珉により種痘が行われており、この地域の大勢の人々が種痘を受けている。[47] さらに当時この地域の支配代官であった江川太郎左衛門英龍の触れにより、幕末期には医師が派遣されていた。[48] こうした種痘による蘭方医と村民のかかわりが、江戸の医師や蘭方医に関する情報の獲得と医師選択に影響を与えたことも考えられる。

次に、江戸の人的つながりである。鈴木家・中嶋家の人々が長期間江戸逗留治療を受ける際の宿泊先は、萩原氏と商売上の関係の深い富田店であった。江戸で起こった火事や事件・情勢の情報をいち早く得る先は、郷宿であり親戚でもある秩父屋などであった。こうした江戸の人々とのつながりを通して、医師に関する情報も得ることができ、頻繁に逗留治療もできたと考えられる。[49]

さらに、経済的背景である。表3に現れる患者達を見る限り、江戸逗留治療を受けていた患者のほとんどは、鈴木家及び有力者である。他の人々が近村の医師にかかったり、村の有力者である中嶋氏を通して玄朴門人の伊東玄珉の診療を受けることはできたが、[50] 江戸の伊東玄朴クラスの医師にかかれるのは、やはりそのほとんどが鈴木家等名主レベルの家であった。それには、人的つながり以上に、費用の面があったと考えられる。実際、表4の弘化五年、八王子で縞の商売を行っていた中嶋家親戚の萩嶋氏分家主人は、江戸での治療の金額等、金六十両余りを支払うために、親戚が集まって家財の売り払いの検討をしている。[51] 萩嶋氏が蘭方医の診療を受けていたのかについては不明であるが、江戸での治療は、やはりある程度の経済力が必要であったことが解る。

最後に地域性である。鈴木家・中島家の住む柴崎村周辺は、第一節(1)で見たように江戸から一日で行ける都市近郊農村であった。さらにこの柴崎村は甲州街道沿いの村であった。そのため、平九郎はじめこの地域の人々は日常的に江戸と行き来をしていた。このような地理的条件がなければ、患者の容体に合わせて江戸から医師を呼ぶことも、まして蘭学塾の師匠クラスの医師を呼ぶこともできなかっただろう。また、第三節(1)の眼病患者のように症状の軽重によって、頻繁に江戸逗留と地元の眼科医による診療を繰り返すこともできなかったと考えられる。その点で、本稿で見た医師選択はこれまで先行研究で取り上げられてきた他地域とは少し異なった特色が現れているといえる。本稿で見てきた医師選択は、以上の背景により成り立った都市近郊農村独特の状況であったといえるのではないだろうか。

まとめ

以上、本稿では『公私日記』を中心に、患者の医師選択についてみてきた。最後にこれまで見てきたことをまとめたい。まず、第一節でみてきたようにこの地域は、街道沿いの都市近郊農村という性質もあって、近世後期には村に定住する医師から村々を渡り歩く非定住医までその種類も多く、人々は病気にかかった時既に医師にかかれる状況であった。無医村の柴崎村の医療は、周辺村々の医師や渡り医師などによって支えられており、無医村の村でも医師による医療を医師のいる他村と同様に

受けることができたのである。

次に、かかりつけ医師の存在と選択の背景である。鈴木家・中嶋家にはかかりつけ医師がいた。かかりつけ医師は、地域的条件のみならず、血縁・文化関係などによって決められていた。村の医師は、ある程度の専門分化はされているが、基本的に何でも対応していた。そのため、通常はかかりつけ医師にかかっていたが、眼科・外科といった専門性などを求められる時のみは、はじめから専門医にかかった。しかし、病状により良い医師がいれば新たな医師を求めていた。複数の医師の関わりは多く、同時にうけることもあった。医師替えはかなり頻繁に行われ、状態が悪化すると段階を経て、象先堂門人の伊藤玄珉にかかった。しかし、最終的にはかかりつけ医師の見立てにも頼っていた。

この地域の場合、患者はたんに遠距離の医師を求めるだけではなかった。患者達の目は、大都市江戸に向けられた。状態が悪化する場合、医師の選択が遠方の地域に向けられることは既に先行研究によって指摘済みだが、この地域の人々が求める先は、江戸であった。その過程は、伊藤玄珉の時と同様、段階を経ていた。象先堂門人伊藤玄珉又は、白鳥医師の後、ある程度の専門的処置を必要とする場合や、長引いた場合などに江戸の治療を求めることが比較的多かった。しかし、有名な医師であっても患者にとっては普通の医師と同じ基準で見定め、医師選択していた。患者達の医師に対する評価はシビアであった。そのため、肺病患者の中嶋氏の例のように、江戸の医師でさえさらなる医師替えをされたのである。さらに、患者の選択は江戸の医師にとどまらない。江戸の医師でも対応できない場合、江戸を抜けてさらに遠距離の評判の医師も求めて行った。

これらの人々が江戸の医師にかかるのは、弘化年間以降、とりわけ嘉永・安政年間であった。彼らが江戸でかかるのは、伊東玄朴門人や伊東玄朴と交流のあった医師が多かった。それは、蘭方医に対する見方もあったのかもしれないが、村民達はあえて蘭方医を選んでいたわけではなく、有名医師という情報から選択していた可能性が考えられた。その背景には、こうした伊東玄朴門人を中心とする蘭方医師・江戸の医師たちのネットワークが影響していたと考えられる。

本稿で見たような医師選択は、以上の背景に加えて、経済的背景と、時期的背景、人的つながり、街道沿いの都市近郊農村という地域的背景などが考えられた。これらによって、多摩地域のような特殊な状況が成り立っていたと考えられる。

最後に今回取り扱えなかった課題について述べたい。宗教・信仰や売薬等医師以外の方法との関係についてである。本稿の表4中島氏の例や眼病患者の例のように、再発する場合や長引くに従い、人々は医師を替えてゆく一方、信仰・宗教的行為も盛んに行い、売薬などの薬にも頼っていた。近世後期から幕末期の医療を考える上で、医師の問題と同様、これらとの関係は欠かせない問題である。本稿では、医師選択を取り上げたため、この問題について触れることはできなかったが、今後の課題として、本稿を終えることとする。

註

(1) 村の医療に関する先行研究として、塚本学氏「十八世紀後半の松本領上野組と医療」(『松本平総合研究中間報告』信州大学人文学部、一九八二年)、青木歳幸氏『在村蘭学の研究』(思文閣出版、一九九八年)、中村文氏「村と医療—信濃国を事例として①」(『歴史学研究』第六三九号)、川鍋定男氏「江戸時代 甲州における医者と医療意識」(『山梨県史研究』第七号)、海原亮氏「近世後期在村における病と医療」(『史学雑誌』第一〇九編第七号)らの研究等がある。

(2) 『公私日記』の分析として増田淑美氏「公私日記の筆者 鈴木平九郎について」(『多摩のあゆみ』第三二号、一九七二年)はじめ、主に公私日記研究会による数多くの論考や、岩橋清美氏「近世村落における村落の変容と家意識—武蔵国多摩郡柴崎村名主鈴木平九郎『公私日記』を中心に—」(『法政史論』第十九号)などがある。なお、『公私日記』を用いた医療関係の先行研究としては、これまでに子供の病気を取り上げた増田淑美「鈴木平九郎日記に見る子供の病気」(東

京桂の会編『江戸期おんな考』第五号）、疱瘡を取り上げた香川良子「鈴木家三人の子供の疱瘡について」（公私日記研究会編『公私日記研究』第九号）、医師についてみた倉員保海「『公私日記』の人びと（その二）」（『新立川市史研究』第五集）がある。ただし、医療史の段階の中で、考察されたものはない。

（3）立川市教育委員会編『公私日記』第一冊（天保八年）～第二〇冊（安政四年）、立川市教育委員会、一九七二～八三年。なお、『公私日記』は現在改訂版を作成中であるため、本稿では既刊の『公私日記』を用いる。ただし、「荻嶋氏」については、増田淑美氏のご教示によって明らかに「萩嶋氏」の誤読であることが解っているため、「萩嶋氏」を用いた。

（4）註（2）参照。

（5）次段落鈴木平九郎及び、日記については、前掲増田淑美氏論文及び、前掲岩橋清美氏論文、立川市史編纂委員会編『立川市史』（立川市、一九六九年）三六五～四一八頁をもとに見た。

（6）蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』第六巻、雄山閣、一九五七年、二二八～二三五頁。

（7）鈴木平九郎とつながりのある江戸の店として、富田屋がある。また、郷宿の秩父屋などもある。郷宿秩父屋については、公私日記研究会編『公私日記研究』第九号に詳しい。富田屋と中嶋家・鈴木家との関係については、多摩中央信用金庫『次郎兵衛から舜司へ―中嶋家伝―』（中嶋秋子発行、一九八二年）。

（8）前掲『公私日記』第一冊、天保八年、二頁。同第一一冊弘化五年、二頁、同嘉永二年凡例、二頁。同第二〇冊安政四年「公私日記見聞録　序」二頁。及び前掲岩橋論文。

（9）註（2）参照。

（10）本稿で頻繁に登場する鈴木家の親戚について触れておく。鈴木平九郎は柴崎村年番名主中嶋家の出身、中嶋家は弘化年間に八王子宮下の萩嶋家から長兵衛（のちに次郎兵衛）を養子にしている。そのため、本稿で登場する中嶋次郎兵衛と鈴木平九郎は義兄弟にあたる。上布田の白鳥家は平九郎の妹さえの嫁ぎ先であり、さえ没後は、同じく妹のかくが嫁いでいる。平家は平九郎の妻の生家である。

（11）国文学研究資料館編『農民の日記』の高木俊輔氏の解題によると、多摩地域にはほぼ全域にわたって二二点の日記が残されている（国文学研究資料館史料叢書五『農民の日記』名著出版、一六頁）。

（12）あきる野市五日市郷土資料館蔵「享保元年五日市村明細帳」及び「享保十九年伊南村村差出帳」。なお、この時期には青梅にも休哲という医師も活動していたらしい（青梅市郷土博物館編『青梅市史史料集』第四六号、青梅市教育委員会、一九九六年、二八～三〇頁）。

（13）前掲塚本学氏論文、青木歳幸氏論文。

（14）この他に、寺院がかかわる記載として、八王子最明寺別当へ鈴木家嘉代が針治療を受けに行っている記載があるが、この場合、竜作のように医師が逗留しているか寺院が行っているかについては不明である。

（15）秋山佐蔵については、田中任氏によると、『公私日記』八王子十日市場の医師が秋山佐蔵であるらしい（『立川医師物語』社団法人立川市医師会発行、二〇〇〇年）。しかし、「秋山佐蔵」という名では見えないこと、登場する回数は非常に少ないことから、この地域ではあまり活動を行っている様子はうかがえない。

（16）『公私日記』には登場しない、この時期の多摩地域で活動を行っていた有名な医師として、引田村（現、あきる野市）の海老沢峰章、相原村（現、町田市）の青木得庵・省庵・玄礼等が見られる（多摩文化研究会編集部編『多摩文化』第二三号、特集『多摩の洋学』一九七二年。青木貞治編・発行『青木家の人びと』一九九〇年。たましん歴史・美術館歴史資料室編『多摩のあゆみ』第一〇五号、（財）たましん地域文化財団、二〇〇二年参照）。その他にも、『公私日記』には登場しないが明らかに活動が確認できる医師は多く、実際は相当数の医師が活動していた。

（17）これまでに地域の医師の状況について、前掲青木書『在村蘭学の研究』、川鍋定男論文により、信濃・甲州については様子がわかる。しかし、大部分はその地域の医師をとりあげているものの、その人物一人の医師の活動を通してみており、村の医師について全体の中で把握している先行研究はほとんどないため、他地域との比較は難しい。

（18）平九郎は次男・三男を医師にしようと試みている。結局どちらも医師にはならなかったが、ここから名主平九郎は村の医師を必要としていたことがわかる。前掲『公私日記』嘉永二年、嘉永五年、安政三年四月九日（二九頁）。

（19）前掲海原論文。

（20）日記中に現れる白鳥氏・伊東玄珉など村と関係のある個別の医師については、前掲倉員保海氏論文、及び前掲田中任氏著書などで説明されている。

（21）白鳥医師について前掲倉員保海氏論文及び田中任氏著から補足すれば、白鳥氏はもともと江戸市谷田町で開業していたが、家が火災にあい、その後下布田村の名主国島氏との縁により、下布田村に越したらしい。その後国島氏との縁からか、鈴木家と婚姻関係を結ぶこととなる。

（22）本田家については拙稿「幕末期在村における医師養成の実態―本田覚庵と三人の弟子を例にして―」（『論集きんせい』第二四号）参照。

（23）本田覚庵の名は孫三郎であり、覚庵は医師や文化人としての号である。通常、名主としては孫三郎を使い、『公私日記』中でも、名主として登場するときは本田孫三郎と記載されているが、本稿では医師としての本田覚庵を見ているため、

本田覚庵の名で統一する。なお、『公私日記』中、通常は本田家とのみ記しているが、この時期本田家で医療活動を行っているのは本田覚庵であるため、本田覚庵の名を用いる。

(24) 『公私日記』に本田覚庵が医師として現れるのは、天保十一年、嘉永二年、同五年、安政三年の四回である。うち本田覚庵が鈴木家を診療するのは、嘉永二年のみである。本田覚庵は書家として祭礼時幟を書いたり、名主として周辺村々の村役人と村負担などについての会合を行う場面ではたびたび登場するが、医師として鈴木家と交流を持つことは少ない。

(25) 小野路村（現、町田市）名主の小島氏が記した『小島日記』（小島日記研究会編、小島資料館発行）では、小島家がしばしばかかる医師として、八王子の秋山氏や相原村（現、町田市）の青木氏などが挙げられる。天保七年・八年と幕末期の日記を見る限り、本田家とはしばしば行き来をしているものの、鈴木家と同様、医師と患者の関係で交流を行っている記載は見られない。

(26) 前掲『小島日記』一九九七年、元治二年二月十二、十三日（四〇～四二頁）。

(27) 三ヶ嶋赤門については、所沢市教育委員会編『所沢市史』（一九八九年）六二一頁。土方氏は土方歳三の親戚であるが、眼科としてよく出てくる。なお、宮本宗悦については、不明であるが、日記中眼科医として扱われている。

(28) 前掲『公私日記』第十二冊、嘉永二年～第十九冊、安政三年。なお、弥七の眼病については註(40)も参照。

(29) 伊藤玄珉については、柴田一氏「近世後期における在村医の修学過程―備中の在村医師・千葉英舜の場合―」（実学資料研究会編『実学史研究』Ⅱ、思文閣出版、一九八五年）によると、嘉永年間以降烏山藩医となっている。

(30) 前掲『公私日記』第一一冊弘化五年一月十日（七頁）。なお、玄珉がいつ浅草から八王子に越したかについては不明であるが、弘化三年三月七日に八王子から五日市へ行く途中通りかかっているため、この頃には八王子に越していたかもしれない。また、玄珉の診療は、前掲『公私日記』第八冊天保十五年九月廿七日（八五頁）から見られる。これに先立ち九月十三、十四日（七九～八一頁）に「伊東玄朴高弟懇意により」と同じ患者の萩原氏の診療の様子が見られるが「玄珉」という名では出てこない。

(31) 前掲『公私日記』第一三冊、嘉永三年六月廿四日（五七頁）。

(32) なお、表2にあるようにこの他にも、榎戸病人も天保十五年、不治の病で白鳥氏の診療を受けた後に伊東玄珉の診療を受けていることから、このような過程を経て伊藤玄珉への診療を受けることが多かったと考えられる（前掲『公私日記』第八冊、天保十五年）。

(33) 天保九年四月に上島氏娘が疱瘡にかかったとき、江戸の医師を頼もうとしている記載がある（実際は患者が亡くなってしまったため呼ばなかったが）。しかし、その後天保十五年まで日記から江戸の医師にかかる様子は窺えない。

(34) 青木前掲書によると、この時期には既に江戸で十以上もの蘭学塾が開塾している。

(35) 『和歌山県誌』によると、松村養全は代々医家の家に生まれ、のちに紀州藩の藩医の中でも名手と呼ばれ、蘭学を修め、紀州藩で外科を用いた最初の人であったという。嘉永五年没のため、『公私日記』に登場することはあまり多くないが、嘉永三年には伊東玄朴とともに、白鳥さえの診療を担当している（和歌山県編『和歌山県誌』名著出版、一九七〇年、七三四～七三五頁）。松村養全が和歌山藩の中でも有名な藩医であったことについては、高橋克伸のご教示による。なお、伊東玄朴・大槻俊斉は種痘所に携わった人物である。

(36) 前掲『公私日記』第一三冊嘉永三年（一六～七〇頁）。なお、さえは嘉永二年にも六月中旬から九月中旬にかけて煩い、その時は「時候」と診断されている。

(37) 前掲『公私日記』第一三冊嘉永三年五月廿日、七月八日（四五頁、六一頁）。

(38) 前掲『公私日記』第一五～第一六冊（嘉永五～六年）、三八～七〇頁、八～二〇頁、一二六～一三七頁。なお、中嶋氏の記載を見る限り、中嶋氏は実際には記載の始まる少し前の四月から伊東玄朴の診療を受けていたようである。

(39) 前掲『公私日記』第一三冊、嘉永三年二月三日～六月八日（一一～五一頁）、第一六冊、嘉永六年八月二九日～十二月廿五日（六〇～八八頁）、第一七冊、嘉永七年四月朔日（三一頁）、同年七月十八日（五九頁）。なお、弥七ははじめ芳蔵という名であったが、眼病平癒を願って嘉永三年三月十五日に弥七に改名する。そのため、ここでは芳蔵と弥七の両方の名で登場する。

(40) 前掲『公私日記』第一二冊～第一九冊、嘉永二～安政三年全頁。

(41) 前掲『公私日記』第一七冊、嘉永七年四月十七日、五月廿七日、六月四日（三六頁、四五～四六頁）。

(42) 前掲『公私日記』第一六冊、嘉永六年八月廿日、廿三日（六〇～六一頁）。

(43) 前掲『公私日記』第一七冊、嘉永七年六月六日、十一日（四七～四八頁）。

(44) 中島氏の時も蘭方医であることについての評価は記載されていない。伊藤玄珉についても鈴木平九郎たびたび「西洋流の療法」という記載をしているが、それに対しての評価は直接的には記していない。佐藤泰然へも、名医と記しているのみである。

(45) ちなみに、種痘所の設立に関していえば、伊藤玄珉も設立の名簿に名を連ねている（伊東栄『伊東玄朴伝』青土社、一九二三年）。

(46) 多摩と伊東玄朴の関係については、前掲「多摩の洋学」に詳しい。玄朴門人以外でも、八王子の秋山佐蔵などは、伊東玄朴や佐藤泰然など蘭方医と深い交流をもっており、相当の交流を行っていたことが解る。（前掲『多摩の洋学』）。

(47) 前掲『公私日記』第十三冊、嘉永三年、三月二十二日。なお、織田家では、

織田研斉・貫斉の他に父と弟も種痘を行っている。織田家は府中六所宮の禰宜を務める家であり、神職である禰宜自らが種痘を行っていることは、注目される（府中市立郷土館編「大国魂神社文書一　神職の部」府中市教育委員会、一九八四年）。

(48) この地域での種痘は、嘉永三年冬には始まっている（註(47)参照）。その後、江川太郎左衛門英龍の触れにより、種痘が行われている。

(49) 江戸の商人と鈴木家等の関係については、註(7)参照。

(50) 中北常八が、疫病にかかった際の記録には、「△当節江戸田舎共霍乱痢病等多く老少死没あり、中北常八痢病重躰ニ付中しま取持ニ而八王子伊藤玄珉老療治」とある。ここでは、「重体（重態）につき」という状況ではあったが、中島氏の取り持ちによって、伊藤玄珉の治療を受けることができたことが解る（前掲『公私日記』第一二冊、嘉永二年七月四日、九〇頁）。

(51) 弘化五年、萩嶋分家主人の死後、親戚で以下の相談をしている。「（前略）新借并病中入用〆金百両余借財之内江戸入用等六拾両只今入用ニ付、三拾両者当分八郎右衛門ゟ立替出金、外三拾両者他借相価置家財其外追々売払返済候積（以下略）」（六月七日、五二頁）、「萩嶋分家主人病中江戸入用并謝礼等入用手当金六拾両当借右返済家具売払、其外跡借財片付等相談与して中嶋同道出会、散田者出府にて不参（以下略）」（六月十七日、五五頁）。なお、この時期、萩嶋家では商売上の大量な出費もあったが、「病中江戸入用并謝礼等入用手当金六拾両」ということから、江戸での診療費として相当高額な金額を支払っていたことがわかる。

〔付記〕本稿執筆にあたり、増田淑美氏には大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。

（総合研究大学院大学、国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者）

（二〇〇三年五月六日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol.116 February 2004

How Did Late Tokugawa Villagers Choose Doctors?: Cases Appearing in a Village Headman's Diaries

OSADA Naoko

The aim of this article is to examine how inhabitants of rural areas chose doctors when they got sick in the nineteenth century. There were many ways to cure disease in the Edo period. In the nineteenth century, village doctors increased in number to cope with villager's needs. As scholars engaging in Dutch learning opened their private schools in Edo, more and more local doctors came to be trained at the schools. Thanks to this development there were many medical doctors working in villages, who had mastered Chinese or Dutch medical learning. So in rural area's people could ask for help to doctors when necessary. People could even choose better doctors to cure their disease. How did they choose their doctors for themselves?

This article focuses on the choice of the medical doctor from the view point of patients and their families, depending on one of the village headman's diaries,"Koshi nikki" as the main source of information. His village was located on the "Koshu Kaido" in North Tama region, in the western suburbs of Edo.

Usually, people depended on their home doctors when they got ill. They chose their home doctor for various reasons. The home doctors were chosen because of their close local, or blood, or marital ties, or cultural relationship, or other reasons. But when people got eye disease or injured, they relied on specialists. And their physical problems got worse, the more often they tended to change doctors. They relied on their home doctors and also the urban doctors.

When patients couldn't get well, they wanted to see urban famous doctors. But they chose doctors with quite practically. They didn't choose the doctor even if he was one of the most famous doctors in Edo. And they sought for more effective doctor and visited him. Many of the doctors chosen by them were doctors who mastered Dutch learning. But this does not necessarily mean that people chose doctors because they learned Dutch medicine. What were the backgrounds behind? One of the major facts in the background was the influence of "Sho-sen-do" which was strong in this particular region. "Sho-sen-do"was the private school of a Dutch medical doctor, Ito Genboku. So his pupils were active in this region. Of course there were other facts, economical, regional, historical condition, human relationship, and characteristics to the suburb of Edo, in the background.